

名曲あり、Jポップあり、珍曲もあり!?

校歌原理主義者、かく語りき

春・夏の甲子園で流れる高校の校歌をじっくり聞いたことがあるだろうか。

森鷗外や法然上人が作った歌詞から、Jポップ調の曲まで、知られざる校歌の魅力を渡辺敏樹さんに聞いた。

編集ライター

渡辺敏樹

●わたなべ・としき 1964年山梨県生まれ。明治大学文学部卒業。85年からライターとして活動を始め、多数の書籍や雑誌を手がける。夕刊フジで「暮末志士の診断書」を連載中。『校歌の大甲子園史』（地球丸）、『ふるさとの甲子園ヒーロー』（徳間書店）、『戦国武将の死に診断書』（エクスナレッジ）など著作多数。

あの人見絹枝さんが発案

高校野球で校歌が流れるようになったのは、陸上の人見絹枝さんの提案によるものなんです。アムステルダム五輪（昭和三年）の八〇〇メートルで日本人女性初のメダリストとなり、表彰台で日の丸が掲揚され国歌が流れる場面に感動した人見さん

が甲子園でも校歌を流しましょうと提案し、昭和四年のセンバツ（選抜高校野球大会）から勝ったチームの校歌が演奏されるようになりました。五輪で流れる国歌は曲だけですから、甲子園でも昔は校歌斉唱ではなく校歌演奏だった。当時は球場内に吹奏楽団がいて、生で演奏していました。春のセンバツは毎日新聞、夏の選手権（全国高校野球選手権大会）は朝日

新聞の主催で、人見さんは毎日の社員でしたから校歌吹奏は長い間センバツだけのセレモニーでした。毎日としてはしてやったり、だったはずです。大会自体は選手権のほうが十年近く先に始まっていましたから、朝日は毎日の真似をしたくなかったと思います。しかし、「春は校歌があつていいね」という声が広がり、センバツに遅れること二十八年の昭

和三十二年から選手権でも校歌が流れるようになりました。

これは推測ですが、朝日はセンバツとは違うやり方をすればいいと考えて校歌斉唱にしたいんだと思います。そうしたら今度は「夏は歌があつていいね」という声が多く聞かれるようになって、今度は毎日が、しまつた」と（笑）。以降、しばらくは春は演奏だけ、選手権は歌入りという時期が続き、ついに昭和四十九年からセンバツでも校歌が斉唱されるようになったというわけです。

同じ学校が登場しても、春と夏では違う校歌が流れているのをご存知ですか？ センバツでは学校から提供された音源を使っているのに対し、選手権では各校に楽譜を提供してもらって朝日放送のスタジオに十人程度のプロを呼んで録音しています。夏は全部同じ歌声だけれど、春は千

差万別で、めちゃくちゃ下手な歌声が流れることもあります。昭和五十九年のセンバツに登場した大船渡高校（岩手）は、監督がピアノを弾いて、野球部員が歌っていました。東北の県立高校がトントンの拍子でベストフォーまで勝ち進み、部員が歌った校歌が何度も甲子園に流れた。一般的には歌がうまい生徒や先生、合唱部が歌うことが多いのですが、大船渡高校のように監督と部員だけで歌った校歌もある。ときどき、謎のおっさんが念仏を唱えているような校歌もあるんです。山口県の南陽工業の校歌は曲がすごくよくて、歌詞もいいんだけど、下手なおっさんが一人で歌っていて、強烈でした。それから十何年もして宇部鴻城（山口）の校歌が甲子園に流れたときに、私の耳が覚えていたあのおっさんの歌声が聞こえてきて、

すぐにわかりましたよ。相変わらず下手でした（笑）。あれは一体、誰なんでしょう……。

日大三高（西東京）も以前は男ばかりの歌声で、しかも下手で、こんな甲子園で流すなよと思うほどでした。一方で、明豊高校（天分）は南こうせつさんの歌声が流れる。南さんは卒業生ではないんですが、大分出身という縁で学校から頼まれ、奥さんが作詞を、南さんが作曲をして、結構話題になりました。

きっかけは、桜美林シヨック

そもそも校歌に興味を持ったのは小学生のとき。高校野球が好きで、テレビで中継を見ていたときに、耳に残る校歌があつたからです。最初に気になったのは銚子商業（千葉）の校歌。「♪もしもしかめよ かも